現場からのレポート

広報委員　新家 一輝

今回は、大阪府箕面市にある児童発達支援・放課後等デイサービス事業所「はつかぜ」の様子をご紹介いたします。「はつかぜ」は、7名のメインスタッフのうち4名が急性期病院や特別支援学校等で実践を積んできた看護師で構成され、重症心身障害のある子どもたちが通う事業所です。お子さんの体調維持にとどまらず、ポジショニングや呼吸・循環管理等を通して“体調を良くする”こと、そして安全・安心の中で楽しく遊び学ぶことをモットーに、保育士や介護福祉士、理学療法士、相談支援専門員といったバックグラウンドをもつ方々と協働し事業を展開されています。

毎日5,6名のお子さんが訪れます（現在、登録15名）。50m²ほどのワンルームに、平日では10名ほどが、そして週末にはそれ以上の人々が集い、時に活気ある、時に癒しのある楽しい時間を過ごされています。

笑顔を大切に

プログラムは、一定期間同じ遊びを取り入れるなど、子どもたちの特性を生かした“繰り返し”を大事にされています。例えば、リトミック、ふれあい体操、ボールプール、もくねんさんや絵手紙などの制作、またお正月遊びなど季節行事も組み込まれています。私が潜入した日は、足湯・アロママッサージでした。昼までの学校で頑張ってきた時間も大切に思いながら、この時間はマットやクッションを駆使し、ゆったりした落ち着ける姿勢を感じ学ぶ時間となっていました。オルゴール音が流れる中、ほんわか笑顔で会話がはずみ、子どもも大人も癒されるいい時間でした。適宜の水分補給や吸引・吸入、適正な装具装着にも配慮し、中には帰る前にお食事をされる子もいました。

ボールスライダー遊び

一方、土曜日は朝からの一日コースで、コンサートや絵本の読み聞かせ、ヘアカットなど、ゲストをお迎えしたプログラムや外出など。「はつかぜ」では、こうした子どもたちとの笑顔の時間を大切に、開設当初よりお風呂を設置していないのも特徴です。

「はつかぜ」と絵本の読み聞かせの皆さん

地域の中での連携

毎日の日誌交換や送迎時の対話に加えて、ご家族とスタッフとで立案した個別支援計画を定期的に評価し、家族との連携の中でケアを展開されています。送迎車には看護師が同乗し、子どもの安全・安心を守っています（医療的ケアに対応しています）。送迎時、学校では教師・学校看護師と、そしてご自宅は街灯のふもとでご家族と、その日のお子さんの様子を共有するなど、連携が描かれている様子が印象的でした。

子どもと家族のための技術向上

スタッフは、全国や大阪府、近隣市・大学等主催の研修への参加はもちろん、事例検討などの事業所内研修にも積極的に取り組み、技術と素養を磨いています。こうして、「はつかぜ」が家族にとって身近な相談先となることも目指しています。

以上、今この瞬間の笑顔を中心に、大人になっていく子どもたちの健康づくりと成長発達を、そしてこれらが家族と共にあることを目指す、まさに小児看護のある現場から報告いたしました。

笑顔たくさん、「はつかぜ」ホームページもご覧ください
→ https://www.mino-hatsukaze.com

2016年度教育委員会研修会報告

教育委員会委員長　平林 優子

2016年度研修会は、「小児看護の実践能力を高める教育―どんな場であっても小児看護ができる人を育てよう。その教育はどうすればよいかー」をテーマに、12月3日（土）、首都大学東京荒川キャンパスを会場に学術・研究推進委員会との共催で実施しました。当日参加者は97名でした。病院所属の参加者のうち、部署の教育担当者や病棟管理者は73%、成人と小児の混合病棟に所属している参加者は約33%でした。基礎教育からの参加者のほとんどが主に実習を担当する役割を担っていました。

「小児専門病院における教育」として千葉県こども病院の内海加奈子氏は、先輩ナースの小児看護の実践・判断を見ながら看護に参加できるパートナーシップナーシング導入のプロセスや成果と課題をお話いただきました。「総合病院における教育」として、済生会横浜市頭部病院の渡邊照子氏には新人看護師に対するOn-JTとOff-JTにおける教育のステップや、成人にも対応できる経験により小児看護も可能であるという認識を育てることなどをお話いただきました。「混合病棟での教育」について武蔵野赤十字病院の尾高大輔氏には、様々な疾患を持つ成人患者と一緒に生活する小児に対する看護のモチベーションを個々の看護師に合わせてサポートし、小児看護に関する学習の機会を提供していくお話をしていただきました。「基礎教育の実践力向上に関する試み」として、永島美香氏には、行動しながら思考する能力を育てていく能動学習・シミュレーション教育の考え方や、大学全体と小児看護学での取り組みをお話しいただきました。

グループワークでは、「所属での教育内容や方法の共有」「医療機関においてはじめて小児看護に携わる人への教育に必要な内容」の2つのテーマについて14グループそれぞれが話し合い、その後全体発表を行いました。成長発達段階の理解、子どもの権利の認識、家族の中にある子どもの存在、小児に特有の生活技術や治療検査の技術、ニーズに応じた学習会、乳児から成人まで計画性をもって受け持ちができるようにする、先輩ナースの看護の見える化、学生や新人看護師の成功体験を増やすなど、今回の研修会のテーマに対し、多くのキーワードが含まれた内容が話し合われていました。

研修会には96%が満足しており、学びが多く、他の施設・教育機関の取り組みを共有できたことや、知りたい内容を聞くことが多かったなどを理由として上げていました。

委員会では、今回の研修会で出された教育の工夫を含め、学会に成果を提供できるようにしていく予定です。

◆ 会員の皆様へ　～メールマガジン配信のご案内～ ◆

ニュースレター第50号をお届けします。50号という響きに学会の歴史を感じております。さて、ホームページでご案内いたしましたように、従来の会員専用SNSは平成28年12月で終了しました。平成29年4月を目標に、新たな情報共有の方法として、会員対象のメールマガジン配信を開始します。学会入会時にメールアドレスを登録されている方には自動配信されます。配信をご希望されない方、メールアドレス変更をご希望される方は、お手数ですが配信状況変更の手続きをお願いいたします。また、入会時にアドレス登録をされていない方で、配信をご希望される場合も、配信開始の手続きをお願いいたします。上記手続きはいずれも右記QRLコードまたはURLにアクセスして行ってください。システム設定や依頼の処理まで少しお時間をいただく場合がありますことをご容赦ください。

http://jschn.umin.ac.jp/mail_magazine.html
（広報委員会）

広報委員会メンバー　●委員長：奈良間美保　●委　員：上原章江、竹内幸江、新家一輝、堀　妙子、丸　光惠

2017年3月　第50号

一般社団法人 日本小児看護学会
Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第27回学術集会開催に向けて

学術集会長 小城 智圭子
（京都府立医科大学附属病院）

京阪神の皆様のご支援ご指導で学術集会開催準備を進め、約半年後には第27回学術集会開催を迎える時期となりました。企画委員の先生方をはじめ学会理事の先生方や多くの皆様のご支援により準備が進んでおりますことありがたく感じております。

臨床現場の大会長としては、6年ぶりとなります。少し臨床色を出させて頂き今回のテーマは、「子どもたちの笑顔は　私たちのたからもの」といたしました。

特別講演には、京都大学発達小児科学教授　平家俊男先生に「小児難病疾患解明・臨床応用開発に向けたips細胞研究の展開」のタイトルで小児領域におけるips細胞研究についてお話しいただきます。現在医療界が注目しているipsについて小児領域での活用等興味深い内容かと思います。教育講演では、京都府立医科大学小児科学教室教授　細井創先生に「Children First　子どもたちが教えてくれる未来の医療と社会」のタイトルで子どもたちの素晴らしさについてお話をお伺いします。子どもたちの秘めた将来性など「たからもの」であることを改めて実感したいと思います。

最近の医療界では、チーム医療が推進されています。そこで、シンポジウムでは、多職種の方に様々な方向から日頃取り組んでおられる「子どもたちを笑顔にするわざ」をテーマにご発言いただきます。「ファシリティドッグ」「ホスピタルアート」「外来治療」「放射線検査」「地域生活」など様々なお立場・内容で子ども達の笑顔を創る工夫をどのようにされているのかお聞きしたいと考えています。

高齢化少子化の到来と共に医療界や日本看護協会でも小児関わる政策が重点課題として提示されています。厚生労働省が推奨している「地域包括ケアシステム」は、成人とりわけ高齢者に対する政策のようにとらえられがちですが、年齢に関係はありません。笑顔が絶えることなく子どもたちにとってよりよい未来とするために、今、私たちができることは何か皆様と共に考えていく学術集会にしたいと思います。

京都の夏は、盆地の特性で高温多湿で過ごしにくいところもありますが、観光都市京都を満喫して頂き、全国からお集まりの多くの方々にとり実りある学術集会となりますよう願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本小児看護学会　第27回学術集会ご案内

学術集会テーマ：子どもたちの笑顔は　私たちのたからもの

【会　　期】 2017年 8 月19日（土）～20日（日）

【会　　場】 国立京都国際会館

【プログラム（1日目）】
特別講演：「小児難病疾患解明・
臨床応用開発に向けた ips 細胞研究の展開」
平家　俊男（京都大学　発達小児学　教授）
テーマセッション、一般演題（口演・示説）、総会、
ランチパフォーマンス、懇親会

【プログラム（2日目）】
教育講演　「Children First ！
子どもたちが教えてくれる未来の医療と社会」
細井　創（京都府立医科大学　小児科学教室　教授）
シンポジウム「子どもたちを笑顔にするわざ」
テーマセッション、一般演題（口演、示説）、共催セミナー

【第27回学術集会 URL】
http://www.jschn27.jp/ から画面指示に従って
登録してください。

【参 加 費 用】
会　員：（事前）10,000 円、（当日）：12,000 円
非会員：（事前）12,000 円、（当日）：14,000 円
学　生：（事前・当日とも）3,000 円
（大学院生や認定看護師教育課程等は除きます）
懇親会：7,000 円

【連　絡　先】
＜学術集会事務局＞
京都府立医科大学附属病院　看護部
京都府立医科大学　医学部看護学科
〒602-8566　京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町465
E-mail：jschn27@koto.kpu-m.ac.jp
＜運営事務局：演題登録・事前参加システム等に関するお問い合わせ＞
株式会社プロコムインターナショナル
一般社団法人日本小児看護学会第27回学術集会担当
〒135-0063　東京都江東区有明3-6-11　TFTビル東館9階
E-mail：jschn27@procomu.jp

委員会活動紹介　災害対策委員会
～熊本地方の災害に関する学会の取り組み～

委員長：浅野みどり
委　員：遠藤　芳子、勝田　仁美、草場ヒフミ、住吉　智子、高野　政子、田村　恵美、古橋　知子、三宅　一代、薬師神裕子、山本　真実

災害対策委員会は、2011年3月11日の東日本大震災をきっかけに、2013年4月に発足した一般社団法人日本小児看護学会委員会組織の中では新しい委員会です。その所掌する事項は⑴東日本大震災および福島原発に関連した災害支援に関する事項⑵平時における災害対策活動に関する事項⑶災害発生時の災害支援に関する事項⑷その他、小児看護における災害対策に関連した事項　となっています。

2016年4月14日21時26分、4月16日1時25分に相次いで発生した熊本県熊本地方の震度7、震度6強の地震では多くの方々が被害にあわれました。その現実に、学会として、委員会として何ができるのか、また、何をすべきなのかを悩みながらでしたが、委員会で検討し取り組んできたことの概要をご報告いたします。

熊本･大分地震災害に関する活動は主として以下の5点でした。①被害状況に関する情報および支援ニーズの確認（4/15～）②支援物資ニーズへの対応の検討　③災害対策委員による相談体制構築　④災害関連情報を掲載した学会HP一覧作成(情報集約)と情報のアップデート　⑤外部組織（日本小児連絡協議会）との連携による情報モニタリング　などを行いました。とくに、①②については九州地区委員(高野先生)や被災地区会員(熊本大学　生田先生)との連絡を取りつつ、わずかではありましたがタイムリーに熊本大学小児病棟、熊本日赤小児センターへ支援物資をお届けすることができました。先生方にご尽力いただいた賜物であり、心より感謝申し上げます。さらに、③④については災害対策委員の精力的な取り組みで、相談対応体制として「トリアージ担当および4カテゴリー（災害時の生活について、心のケア関係、病気や障害のあるお子さまへの対応、放射線関連情報）別に窓口委員を配置する」など、委員会内での役割分担体制を明確にすることができました。

また、みなさまご承知のように、広報委員会との連携により、4月17日（同22日更新）には日本小児看護学会HP上に「熊本地方に発生した地震で被災されたみなさまへのお見舞いとご案内」を理事長、災害対策委員長の連名で掲載させていただきました。

最後に、今後の課題として、①日本小児看護学会としての災害対策における役割の明確化　②中長期的支援を中心とする場合に超急性期はどこまで対応すべきか　③備蓄体制あるいは企業等との協力体制の構築の是非　④メール等の通信手段がダウンした場合の方策について、などがあげられました。今回の学びを活かし、災害看護研修会、災害ネットワークシミュレーションなど日頃の活動を継続して参ります。

支援物資の一例

委員会活動紹介　小児看護政策委員会
～小児看護政策に関する学会の取り組み～

委員長：二宮　啓子
委　員：友田　尋子、内　正子、岡永真由美、山本　陽子、熊谷　智子

小児看護政策委員会では、主に小児看護の重要課題に対する政策提言と健やか親子21（第2次）推進活動を行っています。

1．小児看護の重要課題に対する政策提言

平成28年度は、「小児救急看護認定看護師養成課程」と「看護学教育モデル･コア･カリキュラムの策定」に関する提言を行いました。一つ目は、日本看護協会が行っている認定看護師養成コースを平成29年度から3年間休講することがわかり、そのまま養成が中止になる可能性もあることから、小児救急看護認定看護師の養成継続への協力依頼が会員の方からありました。理事会で検討後、小児救急看護認定看護師会と連絡を取り、6月8日付けで日本看護協会会長宛に、小児救急看護認定看護師会からの「小児救急看護認定看護師養成課程休講に関する意見書」と共に、日本救急医学会と日本小児看護学会の連名で「小児救急看護認定看護師養成課程休講に関する要望書」を提出しました。

二つ目は、本学会の社員総会で評議員の方から平成30年に看護師養成所指定規則看護師カリキュラムの改正が予定されており、少子化に伴う小児看護領域の実習場所確保が困難なことから小児看護学や小児看護実習をなくす案が提示されているとの情報提供がありました。その後、看護学教育モデル･コア･カリキュラムを策定することがわかり、小児看護政策委員会で試案を作成し、理事会で検討を重ね、「1.看護の対象者を理解するために”成長･発達”の重要性を明確に示すこと、2.次世代育成の重要性を明確に示すこと、3.小児を全人的に捉える実習として小児を対象者とした実習を入れること」を盛り込んだ「看護学教育のモデル･コア･カリキュラム策定に関する意見書」を12月21日付けで文部科学省、1月4日付けで日本看護系大学協議会に提出しました。

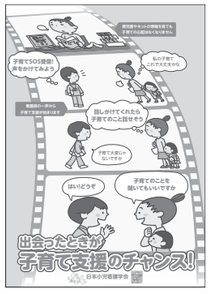
2．健やか親子21（第2次）推進活動

本学会は、健やか親子21（第2次）推進協議会のテーマ2「育児支援等」とテーマ4「調査研究とカウンセリング体制の充実･ガイドラインの作成等」のグループに属しています。

テーマ2の活動として、子育てしている親が身近に接する看護師を育児支援者として認識できること、また、看護師が育児支援者としての自覚を持って子育て中の親に接することができることを目指し、看護師による子育て支援を啓発するポスター「出会ったときが子育て支援のチャンス」を作成しました。会員並びに小児科外来や小児科を標榜する病院等に送付すると共に、学会ホームページからダウンロードできるようにしました。ご活用ください。

テーマ4の活動としては、平成28年度子ども･子育て支援推進調査研究「思春期の母性保健の向上のための効果的な保健指導のあり方についての調査研究」に参加し、調査の計画･分析、国内外の文献レビューと保健指導パンフレットの執筆の一部を担当しました。

また、健やか親子21（第2次）の動向と委員会活動について学会ホームページに掲載していますので、ご覧ください。



「リレートーク」及川郁子さん

① 自己紹介

岩手県水沢市（現奥州市）で生まれました。近所には子どもが多く、いつも日が暮れるまで外で遊んでいました。子ども会が盛んだったころです。大学入学と同時に上京し、帰郷するたびに子どもの声が大人、老人と変わり、静かですが寂しい町になっていると実感しています。聖路加看護大学（現聖路加国際大学）に入学してからは、臨床、教員経験とも変わることなく聖路加で過ごし、昨年 4 月にやっと聖路加を離れ、新世界を楽しんでいます。

② 看護師になったきっかけ

看護師になるとは思ってもいませんでした。第 1 に東京にいくこと、第2に学費が安いこと（当時は安かったのです）、第3に寮があること、第4に入試科目が多くないところ、この条件で探したのが聖路加だっただけです。友人の家で蛍雪時代をパラパラ捲りながら決めていました。初めて、聖路加の玄関を入ったときの薄暗く何とも言えない雰囲気に人生の第1選択は失敗したかと思いましたが、そこは適応力で乗り切りました。

③ 新人時代の思い出

助産実習で出会った赤ちゃんの魅力に引かれて新生児室の就職を希望しましたが、思いもよらず小児病棟に配属されました。51 床の大きな病棟でしたが、ジェネラルと言われた幼児の大部屋が大好きで、特に窓から子どもと一緒に眺めてお話しをしているときがほっとできる時でした。一番苦手であったのは輸液の配合、脱水の子どもが入院すると症状に合わせて輸液を作っていました（今では考えられないことですが）。合っているかどうか、何度も何度も先輩に聞いて、「いいかげん覚えなさい」と言われていました。

日々のケアは何とかなるものの、痛い、帰りたいと泣き叫ぶ中で、何かモヤモヤしながらの病棟時代でしたが、多くの良き先輩、同僚、医師たちに恵まれ本当に育ててもらったと実感しています。

恩師の故常葉惠子先生

④ 小児看護の魅力

外来で勤務するようになり、やっと子どもや家族のことがわかるようになりました。外来診療が終った後まで残って治療を受けている子どもや親とゆっくり関わることで、それまで見えていなかった子どもたちの日常を知ることができました。病棟にいた時は何も見えていなかったことを痛感し、外来看護も満更ではないかもと思えるようになっていました。

慢性の病気を抱えながらも時々外来で会う子どもの成長と、親が親になっていくたくましさを教えていただき、子どもや家族の人生の一部に関わることができることが、これまでの原動力になっているかもしれません。亡くなられた常葉惠子先生が仕事を終えたら病棟でボランティアをしたいと話されていましたが、私もいつかそうしたいと思っています。

⑤ ストレス解消法

少し時間があれば本屋さんをブラブラすること、少しまとまった時間があれば旅行をすること、ほとんど時間がないときは仕事を辞めてからの未来を妄想すること。

⑥ 後輩たちに期待すること

子どものケアができる人は大人のケアもできるとよく言われます。子どものそばにはいつも保護者がいて、一緒にケアしているからでしょう。子どもにとって親は一番の存在。最近はそうばかりとは言えない状況もありますが、子どもだけに目を向けず親の力をも引き出せる看護師になってほしいと思います。また、子どもたちをケアするのは看護だけではありません。他分野の人たちと語り合える仲間をたくさん作ってほしいと願っています。

バトンを受けて欲しい人　田代弘子さん

第 8 回（2018年度）日本小児看護学会研究助成公募

日本小児看護学会では、子どもたちの健康増進に寄与するために、小児看護の実践･教育に関する調査･研究の費用の一部を助成しております。助成は年間2件（1件10万円）です。

【応募資格】

申請者（代表者）および共同研究者すべては2017年度の会費を振り込まれた本学会の会員であること。小児看護実践家を優先する。大学や研究機関に所属するものが申請者（代表者）になる場合は、共同研究者として、1名以上の小児看護実践家を含めることとする。

【研究テーマ】

小児看護の実践･教育に関するテーマとします。但し、営利を目的または営利につながる可能性の大きい研究や他の機関から助成を受けている研究(予定を含む)は助成対象となりません。

【応募締切】

2017年11月30日（木）必着　詳細は、学会HPをご参照ください。皆様からの応募お待ちしております。